

科学政策の矛盾

田邊 元

我国の教育が知識偏重の弊に侵されて居るといふ声は数年前から頻しきりに耳にする所であるが、最近に至つて、其声は愈々高められて来た。例えば今年(昭和十一年一九三六年)六月に開かれた高等学校校長會議に於ける文部大臣の訓辞は之を強調して居り、越えて七月戒嚴令撤廢の為に制定せられた治安維持に関する緊急勅令の枢密院に上議せらるるや、某顧問官は某重大事件(二・二六事件)の由来する所を以て、明治以来の知育偏重にありとなし、特に文部大臣の注意を喚起したと伝えられる。これで見ると、枢密顧問官は大臣を戒め、大臣は校長を戒め、相牽ひきいて、国家社会の革新を意図する思想を、一に専ら知育偏重の結果に歸し、極力相警戒して之を矯正せんと欲するものなること明である。従来左翼理論が科学をその社会変革論の根抵とするに由りて、科学的知識の偏重を此左傾思想の浸潤の主要なる原因と認めることが一部の通念であつたのであるが、今や右翼の国家改造思想も亦知育偏重の結果であると思惟せられるに至つたのである。然しかるに我々の常識に拠れば、知識というものは事物の客観的眞実を捉えるものでなければならぬ。ところで客観的眞実は、各々の事物に就いて必然に一義的なるものでなければならぬ。同一の事実に関する眞理は唯一であることを必然とする。然しからば国家の現実に關して左右相反対する認識を同時に効果として發生し得る如き教育は、実は知育偏重どころではなく

して、反対に未だ知識をして十分に其機能を果さしめず、客観的眞実を追求する科学的精神を徹底せしめざるものというべきではないのか。眞に科学的知識の尊重に徹底せる教育ならば、国家社会の現実に關して唯一の眞理を認識せしめ、その進むべき方向に就いて同一の見解を懐かしめる筈であろう。それがそうでないのは、知育偏重の反対に知育軽視の傾向が従来我国の教育を支配した結果であるというべきではないか。果然、某重大事件の判決理由書には、被告等が其国家を思う念の至純熱烈なるにも拘らず、其認識の偏局せる為に罪過に陥つたという意味が述べてある。此様な認識の不足、知識の缺乏は、到底知育偏重の結果として考へ得るものではなからう。寧ろ反対に、知識を軽視して周匝なる認識と綿密なる思慮とを侮蔑し、単に感情の昂揚、動機の純粹を以て、如何なる行動をも正当ならしめ得るかの如くに妄想する非合理主義の結果に外なるまい。此事件に先だつ某殺害事件（一九三五年八月十二日に發生した陸軍省軍務局永田鐵山局長が斬殺された事件。相沢事件）の被告の公判廷に於ける陳述は、一般世間を驚かすに足りる常識の缺乏、思想の偏狹を示して居たではないか。此の如き結果が知育偏重の教育に由来するとは何人が思惟し得るであろう。それは其反対でなければならぬ。某重大事件に關して、平素最も保守的なる新聞の論說すらもが、一般教育に於ける知識の開発を当面の急務となし、啓蒙の必要を力説したのは、此点に顧みての結果であろう。これは固よりファッシズムの過度に急激なる進行に對する資本の自家防衛を主要なる動機とすること疑われない。併しそれにも拘らず、一般社会の輿論が之を要求したのであることは、事実として承認せられなければならぬ。然るに政治当局の上層部が層々相戒めて知育偏重の弊害打破を策するのは、詮ずる所、現実に對する認識を晦まし批判を鈍らせ、認識と批判とに伴つて起る革新意志を全面的に抑圧して、現状維持に満足せしめんとする為に外なるまい。それは所謂、民をして倚らしむべし知らしむべからず（論語 泰伯篇）、とする反民衆思想の發現であるといわねばならぬ。それであるから、一方に於て文

化科学、社会科学に関する知識を制限して、知識の代りに情操と信仰とを鼓吹することを務めながら、他方に於ては主として国防充実の目的を以て、自然科学の奨励に極力を致すの矛盾を敢てして怪しまないものである。現に去六月中首相が學術振興会の理事や幹事と会見合議したことが報ぜられた。學術振興会は固より自然科学のみならず所謂人文科学の諸部門をも含むものであるが、併し其主たる目標が前者にあり、其経費の大部分がその研究奨励に充てられるものであることは周知の事実である。其故、国防の充実、産業の發展に直接貢献すると考えらるる自然科学には極力奨励を与え、人文科学に於ては日本精神東洋思想の涵養に役立つ研究は特に之を奨励するも、社会的現実の認識と批判とに導く理論の研究は極力之を抑止し、其理論的知識を出来得る限り制限しようというのが、今日の科学政策の基調であると断言して差支え無いであらう。

二

自然科学の奨励は今日の如く専ら国防充実の見地から行わるるに先ち、既に産業發達の手段として久しく歴代内閣の政策とする所であつた。併し何れの目的を主とするにせよ、その着眼が専ら科学の応用に存し、理論の開發に存したのでないことはいうまでもない。眞実を愛すること善美を愛する如く、何等実目的の前提とすることなき純粹の知識を以て、人間活動の最高なるものと考えた古典希臘の精神に現われたような科学への愛というものは、一般に東洋思想の多く与り知らざるところである。今日知識の偏重を戒める声の高きは、其底に西洋思想を斥けて東洋思想を振興する意図を含むものなること言うを俟たない。自然科学を奨励するといふも、その目的とする所は応用であり、直接軍備と産業とに利用せらるる發明の多からんことを求めるに過ぎない。眞実を愛する心を涵養し、知ることの喜びを味わしめる如きことは全然意図の外にある。

ただ今日の高度に進歩せる科学に於ては、深き理論の根抵と広き知識の展望とを缺くとき獨創的なる発明は望み難く、重要な発見は期せられない。工学が工業大学を要求し、其処に於ては理化学高等数学が教授せられるのも、綜合大学に於て工学部農学部或は医学部と、理学部との密接なる提携が策せられるのも其為である。製鋼の研究が物理学者に由つて指導せられ、空中窒素の固化や毒瓦斯ガフスの製造が理科出身の化学者の手に委ねられるのは、其顯著なる実例に外ならない。理論と提携しそれに指導せられることなくしては、応用上の重要な発明も発見も期待し難き現状に於て、啻ただに応用的方面のみならず理論的方面に亙りて全面的に自然科学の研究を奨励するのは、全く已むことを得ざる必要に出るのである。政治家にして科学を愛好し其研究を趣味とするカルノーの如き人も、科学者にして政治家を兼ねるパウルヴェの如き人も未だ出でざる我国に於て、實用主義を離れた科学奨励の意義を解する為政者を求めることは、木に縁つて魚を求める如きものである。

否、啻ただに政治家が科学的精神の何たるかを理解しないばかりではない。所謂いわゆる科学者と称せられる人々の間にも、実は真正の科学的精神を見出すこと必ずしも甚だ多くはないのである。固もとより自ら進んで科学の研究に志した科学者が、生来科学を愛好し知識を尊重し、而して其研究に深入すれば深入する程益々親しく自然の秘密に参して、愈々純粹に科学的精神に徹することは必然に豫想せられる事である。其結果はおのずから啻ただに専攻する学の範圍に限らず広く一般に自然の法則的統一を感得し、延ひいて人間社会に於ける道理の支配を信じて、社会の進歩が真実の認識に依らざるべからざることを観念するに至るべきは理の当然でなければならぬ。感情を以て道理に代え、信仰を以て知識に換える如きことは、科学的精神の容ゆるさざる所である。然しかるに実際に於ては、此の如き精神の充実せる科学者の必ずしも多くないこと意外という外ない。自己専門の

研究に於ては顕著なる業績を挙げて居る人々が、専門以外の一般の事物に就き全く科学的思考を適用することを知らず、科学的的精神とは正反對なる蒙昧主義の跳梁を觀過するばかりではなく、自ら其生活行動に於て斯かる主義の産物たる迷信に沈湎して慚ずる所が無い場合が少なくない。極めて卑近の実例を挙げるならば、科学者を以て自ら居る人にして家相方位を云々し、福運招来の為に戸籍面の名を改め、或は吉事凶事の日取を詮議する如き、屢々我々の目撃する所である。斯かる人々が科学の実証的精神と相容れざる伝説を迷信する如きは怪しむを須いざる所、況や国家社会の缺陷に注意を向け、其由来を實証的に認識せんとする如き要求を全然缺如し、ただ自己の研究に必要な研究費さえ豊富に支給する政府であるならば、他に如何なる不合理を行うも敢て関知する所でないとするのは当然の事であろう。併し斯かる科学者が縦自他共に科学者と認むる人々なるにせよ、其精神に於て科学者と称せらるべきものでなく、単に一方面の技術家に止まることは縷説を要しなと思う。苟も学者といわれるからには、仮令如何なる特殊の問題を研究するも、其背後に潜む全自然の法則的機構を洞見するものであり、該特殊に於て普遍の道理を觀取するものでなければならぬ。固より自然の無限に複雑なる多様を簡單に一様化することは許されない。併し如何に特殊なるものといえども普遍の代表であり、如何なる微小部分にも全自然の機構が潜むことを觀念し、深き根本の原理に対する洞察と広き聯関に対する展望とを有するのでなければ、真に科学者といわれないことも疑が無い。今日極度に民衆化せられて居るラジオの源はヘルツの電波発見に存することというまでもないが、ヘルツの実験にはマクスウエルの理論が背景に存した。此等の偉大なる科学者の頭脳は極めて特殊なる現象の奥に、最も普遍的なる、全自然を貫通するというべき法則の潜むことを洞察するに由つて、応用の最も広き重要なる発見を成途げ得たのである。現今物質の最小不可分要素と認められる数種の微粒子は、巨大のエネルギーを有し、其運

動速度の極めて大なるに由り、世界の空間時間的統一に関する相対性理論の適用を要求するものと思惟せられ、此理論と量子論との綜合を求むる現代の物質理論は、真に所謂最大なるものと最小なるものとの統一を志向すると考えられる。今日未解決にして研究の焦点となつて居る、宇宙線と原子核との關係の如きも、端的に斯かる方向を示す。眞の科学者は、一般に此様な最大なるものと最小なるものとの統一聯関を洞察把握するものでなければならぬ。此洞察を缺くとき、其研究は眞の意味で科学的であることは出来ぬ。それは単に知識蒐集乃至技術的改良の域を脱しない。ただ此の如き洞察を含む理論と提携する実験的研究のみ、眞によく科学的たり得る。其根柢を成すものは畢竟科学的精神に外ならない。然るに精神は如何なる場合にも汎通を求めぬ。縦自己の専門外に就きて妄に臆断を加えることが実証的精神の許さざる所であるにせよ、如何なる事物も法則に支配せられ、如何なる現象にも道理の貫通することを信ずる合理主義に於て、科学的精神は汎通でなければならぬ。今日単に技術的改良に止まらざる、其以上の科学的発見の可能なる為に要求せられるものは、正に科学的精神である。而してこれは飽くまで事実を重んずる実証的精神と、全存在の法則性を信ずる合理的精神との統一でなければならぬ。

固より斯くいうも、一切の事実を法則に由つて演繹するのが科学の能くする所であるという意味ではない。否、法則は如何に多く結合せらるるも、其規定する所は事物の一般性であつて個別性には及ばないのである。法則を結合してその規定する内容を特殊化し行くも、その特殊化の系列は所詮有理数の系列に比せらるべきものであつて、無理数に比せらるべき個別には達しない。後者は有理系列に相対的であると同時に之を超えざる創造的統一として直觀せられる外ないのである。法則の一般は直觀的事実と離れては単に仮言的たるに止まる。ただ所与の事実と相關的にのみ法則は定言的限定をもつことが出来るのである。科学的精神が実証的

精神と合理的精神との両面の媒介統一たることを必要とするのもこれによる。併しそれだからといって、単なる個別的事実は知識となることは出来ぬ。知識は直観的なる個別が普遍的の法則に限定せられる限りに於て成立する。一般的なる法則が具体的に実現せられた個別的事実としてのみ事実が認識せられるのである。個別と一般、事実と法則とは相俟つて知識を成立せしめる。両者は矛盾的に対立しながら相互否定的に媒介せられ統一せられて始めて具体的なる認識を成立たしめるのである。其限りに於て法則性は事実の認識を可能ならしめるもの、従つて合理的精神なくして一般に知識は不可能であるともいわれるのである。如何に多くの実験費用を支給して自然科学の研究を奨励するも、その根本たる合理的精神の涵養を閑却し、更に、飽迄成心を去つて謙虚に客觀的事実に沈潜しようとする実証的精神を抑圧し、自由に眞実なるものを探求する欲望を阻止するならば、到底自然科学の進歩を庶幾することは出来る筈が無い。知ることの純粹なる喜びを味わしめ知識の活発なる探求活動を促進することなくして、ただ応用を目的とする実験的研究を奨励するも、其結果は技術的改良以上に出でることは困難である。否、十分に応用上の価値を有する技術的改良さえ、今日の高度に進歩せる科学に於ては、深き理論の根抵と広き知識の展望となくしては、到底不可能ならざるを得ない。此事は囊にも述べた如く既に科学者自身の現に自覚する所なのである。ただ生得の本能に委せて人為の能くする涵養を念とせざる科学者は、最も根本的なる意味を有する科学的精神に注意を向けること少なく、却て此精神と相容れざる妄信と没批判と無関心とを自己の専門研究以外には恣にして恬として顧みざること多きは、甚だ遺憾といわなければならぬ。為政者がこれに乗じて、一方に知識偏重を非難しながら他方に於て科学奨励の政策を掲げる矛盾を犯して何等怪しむ所の無いのは、誠に自然の事である。併し知識を軽んじ科学的精神を抑えて而も科学を奨励せんとする程明白なる矛盾は少ないであろう。恰も運動精神を抑えて体

育を奨励せんとする如きものである。科学的精神を嫌悪し、其両契機たる実証主義と合理主義とを排斥して、科学研究を奨励するのは、根幹に斧鉞ふえつを加えて花実の栄えんことを求むると一般ではないか。此の如き矛盾を許す科学者の態度も遺憾という外ない。

三

古代の希臘人ギリシアは幾何学以外に自ら創始した科学は少ないといわれる。彼等の間に發達を遂げた天文学医学等の諸科学も、其起原は彼等自身に存したのでなく、先行の東方諸民族に發したものとせられて居る。併ししかそれにも拘らず、諸科学が希臘ギリシアに始まったと普通に考えられるのは、彼等希臘人が先行諸民族の間に發生した特殊の知識を一般的に組織立て、一貫する理法の之を支配することを明にした為である。約言すれば希臘人は科学的知識の材料を他に仰ぎながら、之を科学に組織する方法と、その方法を使う精神とを所有したことに依つて、科学の建設者たり得たのである。西洋の科学思想が凡て此処すべに源を發すると思惟せられるのもこれに由る。而して彼等は運動变化する自然の内に不変恒常なる理法の一般的形相として貫通することを明瞭にすると共に、進んで人間社会の政治組織にまで斯かかる恒常の理法の存することを究明した、政治学は希臘の科学の冠冕かんべんたり精華たるものである。固もとより斯学の大成者アリストテレスがはつきり述べて居る如く、人間生活の科学に数学的精密を求めるとは出来ない。個人の自由を必然的なる契機とする所の倫理と政治とに関する理法は、一方に於て歴史的發展を含む国家社会の型的法則であると同時に、他方に於て自由意志を保有する個人に対して規範たる法則である。それは実践的に作為せられるものの規範法たるが故に之に違背する实例の可能を豫想し、加之しかのみならずそれが社会の歴史的事情と相対的なるに由り、型として推移することを豫定する。

古典的なるアリストテレスの政体の分類が、統治者の数に従つて三種の型を分ち、更に其各々につき正常なる形態と正常ならざる形態とを区別したのは、斯^かかる思想の具体的なる典型である。ここに我々は、今日の歴史的文化科学の自然科学と対立せしめられる所以^{ゆえん}の方法論上の特色の、既に明瞭に認められたる跡を見るこゝとが出来る。十九世紀初の歴史学派の擡頭に伴い、諸文化が夫々^{それぞれ}の国民に固有なるものであり、それは一般に諸国民の歴史に於て發生し發達するもの、例えば政治法律にしても自然法的に一樣なる理想国家の理念に従つて造られるものでなくして、国民の歴史的^{せいし}の生活の内に生まれるものなること、恰^{あた}も國語の造られずして生まれると一般なることが、闡明^{せんめい}せらるるに及んでも一層歴史的文化科学に於ける個性の重要さが強調せられ、其極法則的自然科学に対する個性記述の特色が誇張せられて、歴史的認識に於ける法則の意味が無視せられる傾向さえも現われるに至つたのである。所謂^{いわずゆる}西南^{ドイッ}獨逸^ツ學派の方法論の如き其實例に外ならない。併^{しか}し斯^かかる傾向の方法論者といへども認める如く、個性の認識は却^{かえ}て型の一般性を媒介とすることなくして行われるものではない。一の個別を他の個別から分つて其個性を認識するには、それ等を比較する為に、矛盾的に対立する一般的なる型を用い、一の個別が何れの型をより多く實現し、それと対立する型を實現する所より少なきかを明かにし、それに由つて此二つの型に対して反対の關係を有する他の個別とそれとの対立する所以^{ゆえん}を示すことが必要とせられる。此様な型は勿論^{もちろん}歴史的現實の内に内在しそれに實現せられるものとして発見せられるのでなければならぬが、同時に抽象的^{しじやう}の一方的に昂揚せられ、極限に於ては所謂^{いわずゆる}理念型の絶對的なる形態にまで純化せられる。此種の純粹型の、目的實現上合理的なる構造を明にすることが、即ち歴史的^{せいし}的文化科学の理論の目標となるのであつて、斯^かかる理論の一般性を媒介とすることなくしては歴史の個別的認識も成立することが出来ないのである。而^{しか}して此様な型は個人^{じん}の自由作為を容れる文化形態に属する

ものであればある程、それからの背反が現実により多く可能なる如き規範の意味を有し、反対に個人の自由作為を容れることの少なき社会組織に属すれば属する程、自然必然性に接近する。実を言えば、絶対に人間の作為を離れて存在する自然の一般的關係を表わすと考えられて来た物理学の因果的法則さえも、最近の量子理論に於て明にせられた如く、その認識の為の観測に必要な実験的操作が、観測せらるべき物理系に攪乱を加えるに因り、所謂不確定性を惹起し、其処に物理学的主観の所在が暗示せられるのであるから、仮令物理学の理論に於ては主観性の痕跡が完全に排除せられ、理論は物理学の自然が自己の内面的構造を数学の記号に於て語るものであつて、何等主観の自由作為が加わる餘地は無いといわれるにせよ、その物理学の自然が実験的操作に於て辯証法的に否定を媒介として自己を表現することそれ自身に、主観性の可能が存すると解せられる。ただ其主観性は自由なる意志を以てはたらく個人的主観に属するのでないばかりではなく、更に個人よりも一層自由作為のはたらきの少ない社会的主観にも属するのでなくして、却て一般的に恣意的自由を完全に否定し、単に自然がそれを通して自己を表現する媒介にまでそれ自らを純粹に形式化した主観性一般（カント哲学に所謂意識一般）である所から、主観性はただ客観的自然の辯証法的否定に於てその所在が暗示せられるだけで、何等自由作為の跡を示す所がないのである。併しそれは自然の否定即肯定が即ち精神の成立であり、客観の不確定性が主観の所在なることを左右するものではない。是に由り、所謂自然の因果的構造さえもが、なお認識に於ける主観性の極限的形態に対応する被媒介的存在たる意味を有することが認められなければならないのである。所謂自然も歴史的文化と同じく、基体即主体の辯証法的世界の内容に外ならない。斯かる世界の媒介せられた基体的側面が物質的自然であり、主体的側面が精神的文化の歴史を形造る。併しそれは辯証法的世界の構造上、相互に矛盾的に対立する反対の側面を夫々に否定契機として含

むが故に、自然も歴史的であり、歴史も自然的でなければならぬ。具体的なる存在は単なる物質でも単なる精神でもなくして、両者の否定的統一であり、従つてその媒介的綜合の發展段階として所謂自然と歴史とが成立するのである。其中間に立つ両契機の直接的合一としての有機体が、両者の性質を分有するのも其為である。生理学解剖学等が一方に於て一般生物学や理化学と同様の一般法則性を要求すると同時に、他方民族的特性に着目し、更に臨床医学に至つては、個人差をも注意するのでなければ治病の目的を達することが出来ない。斯く考へるならば、歴史的文化科学といへども其基体的側面に於ては、物質的自然に近き法則的構造を有するものも何等怪しむに足らぬこと明白であつて、血と土との自然的制約から、物質的生産の社会的關係に至るまで、自然の因果的法則に近き必然性一般性を示すのは当然の事である。併しその所謂自然の因果的法則が上述の如く、具体的には歴史的文化と比論的に相似なる被媒介的構造を有しなければならぬとすれば、実は斯かる一般法則的關係も辯証法的世界の構造聯関に属するものと認められなければならない筈である。斯かる構造聯関の型的法則なくしては、歴史的文化科学も科学として成立することは出来ない。経済史觀の歴史的法則も斯かる意味の法則として、今述べた如き歴史の基体的側面に妥当するものと認められなければならないならぬ。歴史の科学性がこれに依る所多きことは、虚心に眞実を求むる者の承認せざるを得ない所である。併しそれが歴史の主體的側面に於ける文化の自由形成と相容れない如きものでないことは勿論、却て此基体的法則の認識こそが眞に具体的なる精神の創造に対する媒介となることも明である。此事は理論的に上に略叙した世界の辯証法的統一の構造上必然に認めらるべき所であるが、事実として今日の政治上に於ける一切の企劃が經濟に制約せられ、凡ての精神的文化活動が物質的生産の社会的關係を無視しては殆ど不可能なるに顧みて、何人も疑う能わざる所であらう。民衆の知識を制限し、社会の進展に関する法則を晦まして

批判を封ずるも、為政者自身がその政治的施設に科学的知識を必要とし、特に経済財政の正確なる知識を有する者が今日の政府の主脳となるの必然なることは如何ともすることが出来ないではないか。況や更に広く所謂ブレイン・トラストの如き専門学者の知識的協力を求むる制度を、種々の形に於て必要としながら、教育に於ける知識偏重の弊を説くのは甚だしき矛盾といわなければならぬ。啻に自然科学者の国防産業の充実発展に対する協力を要求するのみならず、文化科学者の政治経済を始め一般に国家的施設の計画運用に参与することを必要とし、更に議会が従来の如き常識的知識水準から高められて分科的知識を有する議員の組織に改めらるべきことが将来の問題として考慮せられる時に際して、教育の反知識主義を鼓吹する如きは、明白なる時代錯誤でなくして何であろう。人文科学と自然科学とは批判主義の方法論が教える如き対立性を有し、一応それに従つて區別せられることが必要であるとしても、其対立は世界の辯証法的構造に由来するものなるが故に、実は互に媒介統一せられることを要求し、対立區別の半面に却て比論的相似を示すのである。両者を全く別のものとして分離することは許されない。為政者が両者を全然反対の方法で取扱おうとしても、事実上それは不可能なのである。その實際為す所の矛盾は、明白に之を示すといわなければならぬ。ただ自然科学の場合には、其主観性は否定的に形式化せられるから、その實際上の応用は、科学の認識主観とは別に外から来り加わる人間意志の、技術的製作の目的に従属するのである。知識は此目的意志に対し無記なる如くに主観性を抽象したものであるから、それは如何なる目的にも利用せられ、知識が意志を規定する如き所が無いように見える。此事が自然科学の知識を無害なるものに見えさせ、為政者が之を奨励するに何等の危懼を感じない所以となる。然るに人文科学の場合には、認識主観は意志的主体と全く分離せられ抽象せられることは出来ない。固より知識は如何なる場合にも、存在するものの知識でなければならぬから、意志的

主体が自己を存在に委ね、後者の内に自己を否定するものでなければ、決して客観的に妥当なる認識が成立することは出来ぬ。一切の成心を捨て謙虚に存在に随順することなくして、真実の知識は達成せられるものではない。併しながら歴史的現実には実践的意志と離れて存在するものでなく、常に後者に相関的なものである。歴史は自然の如く人間の意志を離れて永久に繰返される関係に由つて成立する存在でなく、人間の実践を通して実現せられんことを求める、未来への方向を含む所の現実である。歴史が単に有るものでなく、有ると共に作られつつあるものである、といわれる所以である。私的な主観性から脱却して公的な主体性を実現せんとする実践的意志と否定的に媒介統一せられた認識主観に対してのみ、歴史的現実は成立する。其限り歴史的存在に關する科学的認識は、未来への実践的意志と相関的關係に立つのであつて、後者と全然無關係に無記で留まることは出来ない。科学的認識の客観性とは正反對に、実践的意志が政治的野心の形をとり、其目的の為に歴史を歪曲し、社会的事実を捏造宣傳する如きことが可能なものも、知識と実践との此様な内面的相関關係が、自然科学の場合と異なる、歴史的社会的認識の特色たるに因るのである。これが為政者の危惧し嫌悪して、斯学の知識の普及と發達とを抑えようと欲する所以に外ならない。併し彼等自身の政治的施設が、一に斯かる知識に指導せられるのでなければ到底成功を期することが出来ず、加之今日の如く複雑困難なる事情の下に於ては、更に専門学者と協力するのでなければ、適宜の処置を施すことが出来ない以上は、知識の嫌悪は政治の破産を結果する外ないであろう。為政者が他の勢力ある部面の強硬政策を、周到の用意と綿密の考慮とを缺くものとして危む傾向のあるのは、実は該部面の知識の粗漫を理由とするに歸するではないか。自己の知識の優越だけは自信し保有しつつ、他の部面には之を否定し、一般民衆の知識に接近することを阻止しようとするのは、大きな矛盾である。

四

自然科学の知識は之を尊敬し之に服従するものに由つてのみ利用せらるることは、今日何人も疑わぬ所であろう。人間に利用せらるること大なる自然力は同時に甚だ容易に人間を倒す破壊力でもある。現代文明の中枢を形造る動力たる電気が、一度其法則を無視して取扱わるとき危険極まりなき破壊物なることは、小学生もなお之を知る。然るに其存在の構造に於て自然と比論的相似を有する歴史社会の法則に關して、之を無視し蔑視して人間の恣意が遂行せられ得るかの如くに妄想するものが、老巧を以て自任する政治家の中に少なからざること驚くべき事実といわなければならぬ。過去数年間に頻發して国民を極度の不安に陥れた幾多の不祥事は、一に社会の歴史的法則を無視し輕視した結果であるという外ない。歴史もその基体的社会的側面に於て甚だ自然に近き必然の法則性を有することは囊に述べた如くである。之を無視し、或は之に背いて社会の歴史的進行を規定しようと欲するならば、宛も自然力の如き破壊性を社会も亦發現するのである。此破壊力の爆発を免れ、社会をして正常なる發達を遂げしめ得る為には、何よりも歴史的法則に従い社会の動向を正しく認識することを必要とする。然るに自然の場合には小学校の児童もなおよく知る所の道理を、歴史の場合には七十の老政治家が忘れるのである。之を思うとき、当面の急務が知育偏重の弊を矯正するにあるどころか、反対に一層科学知識の開發を計るに存することは明白ではないか。

右の如き踏易き道理を無視してなお頻に知育偏重の弊が叫ばれる表面の理由としては、西欧の科学文明の破産ということが重要視せられる。併し西欧の科学文明を繼承し、加之国家の施設を専ら科学的に遂行しつつある国家が現に勢力を有するという事実に対しては、科学文明の破産という標語は一片の空語に帰する外

ないであろう。科学的精神が必ずしも国を亡ぼすものでなく国を興すものであり得ることの実証を、そこに認めようとするのは、偏見に外ならない。斯かる国家に優勝する為には、我国もまた十分に科学を生かして使うのでなければならぬこと明白ではないか。謂う所の西欧の社会的危機国際的破局は、実は科学的精神発展の結果であるよりも、寧ろ反対にその抑圧窒息の結果であるといわなければならぬ。科学の教える真実を歪曲し、歴史的法則を民衆の眼から押隠して、歴史の進歩に逆行する政策を強行しようとする結果が危機を招致しつつあるのである。知識排斥を主張するのは我国の為政者には限らない。既に西欧のファシズム国家に於てはそれが単なる主張に止まらずして、実行に移されて居るのである。而して其等の国々の誇張せられた国民主義が、文化の歴史性を強調し国民精神の強化を要求しつつあることも、我国より一步を先んじて居るといふべきであろう。『独逸物理学』という如き不可思議な題名の教科書が有名な物理学者に由つて公にせられ、而も却て専門雑誌に現わるる研究の水準が著しく低下し、従来世界に誇称した独逸科学が萎靡振わざることとは忘れらるる如き現状である。斯かる極端なる国民主義が国民文化の個性を誇張的に宣揚鼓吹することそれ自身、実は一般的なる歴史的法則に支配せられる共通の現象たるに過ぎない。反科学主義も知識排斥も歴史現象としては科学的法則に由り知識的に説明せられるのである。宛も医学を軽んじ自己の身体のみは生理学の法則に支配せられざる如くに妄信する異常心理の持主が、其心理の機能的説明を却て生理学の法則に由つて与えられることを免れないのと一般である。科学的知識を歪曲し抑圧し杜絶しても、その対象たる現実には消滅しない。ガリレイに地球の運動を否認せしむるも依然として地球は動くのである。歴史的知識を排斥したからとて、それが為に歴史の進行が止むものではない。宛も地動説の弾圧者を載せて地球は依然として廻転する如くに、知識排斥そのものが一の歴史現象として歴史的法則の支配を脱し得ないこ

とは、極めて皮肉なる事実というべきである。知識の杜絶に由つて事実が消滅しない以上は、更に知識の代りに信仰を置換え、科学に換えるに伝説を以てし、道理を教える代りに感情を鼓吹したところで、単に信仰伝説感情を以て真に現実を改変し支配することが出来ないのは、縷説を俟たずして明白であるといわなければならぬ。

併しながら斯くいうのは、決して科学的知識の万能を信じそのみを以て国家の歴史的使命を果たすことが出来ると主張する意味ではない。既に前に述べた如く歴史的現実の個性は、科学の法則的一般性のみから導けるものではなく、両者は夫々独立に相対立しながら、而も相俟つて始めて現実の認識を総合的に成立せしめるものなのである。更にこれもまた前に注意した所であるが、歴史的事実は実践的意志と対立しながら相互に相豫想して、過去の歴史と将来の実践とを超越的に綜合する現在の絶対的統一に於て相關的に成立するのであつて、斯かる統一の動即静に於てのみ歴史的实践は可能となるのである。歴史的認識の個性とは斯かる実践的意志の内容と相關的なるものに係わるの謂であるから、それが基体の一般と主体の個別との相互否定的なる媒介を根拠とするものなることは明白である。社会の一般的科学的法則はその基体的側面に關し、国民や個人の特殊性はその主体的側面の規定に属する。此後の側面を無視して前の側面のみを重視するのは、非歴史的なる抽象的合理主義に外ならない。斯かる公式主義的合理主義を排斥する意味に於ては、歴史主義国民主義も意味を有することを認めなければならぬ。明治以来の教育が歴史的必要に従つて一に西洋の合理主義に則り、其結果日本精神東洋思想の特色を忘れた所があることは否定出来ない。それが今日の国民主義歴史主義の反動を喚起したのは必然である。而もこれは決して単なる反動として排し去らるべきものではない。却て具体的なる知識の成立に缺く能わざる契機なのである。国体の尊嚴に対する信仰、神話伝説に

表現せられた民族感情が、我国の世界歴史に於ける使命の自覚に裏附けられたる国民の実践的意志として動くことに由り、始めて科学的知識が主体化せられるのである。科学的知識の必要を強調するのは、科学主義の立場から所謂知識の為の知識を宣伝する意味ではない。却て歴史的实践に対するその不可欠なる意義を明瞭にする為である。東洋思想の否定性を西洋の人文主義の肯定性と媒介し、日本精神の直接性を西欧科学精神の論理的媒介性と綜合することが、我国民の負う所の歴史的使命に属すると信ずるに由るのである。過去に於ける日本の文化史的意義は、広く東洋思想を摂取して、印度の神秘的宗教的觀想と支那の政治的倫理的实践とを我国固有の国体精神に媒介統一し、以て印度にも支那にもなき独自の文化を産出したことにある。此直接的包容同化の精神が更に西欧の論理的科学思想と媒介せられて新しき文化を創造するに至ることこそ、将来に対する日本の世界史的使命でなければならぬ。国家の興隆に軍備と産業との缺くべからざるは言を俟たないが、武力富力のみで国家の最高の意義が充実するものでないことも明である。歴史の要求する国家の使命は固有文化の創造にある。此意味に於ける我国の歴史的使命に鑑みると、未だ僅かに其發達の半にも達せざるに、早く既に科学的精神の涵養を中止し、知識を抑えて非合理主義の直接態に留まろうとするのは、明治の初年に示されたる進取の国是に背く固陋ではないか。国防と産業とに対する必須の手段として奨励せらるる自然科学も、国民思想の統一に有害なるものとして抑圧の運命に瀕する文化科学も、共に同一科学的精神の産出する所である。此根本の精神を培わずしては自然科学の發達を希望するも、その望は達せられるものでない。併し此根本の精神を涵養すれば同時に必然の結果として文化科学もまた興隆することを許さなければならぬ。国家の發達に貢獻するのは前者のみであつて、後者はそれに与らないばかりではなく却て有害でさえあると思惟するのは、科学の何たるかを知らざる結果に外ならない。斯かる無識を以て国策を樹立せ

んとする程危険なる事があるか。有害なるものは文化科学の真理ではない。歴史的实践に有害であるという自身、既に理論の虚偽に対する晦くらますべからざる徴証である。恰あたかも自然科学の理論の實驗的検証に堪えざるものが虚偽と認められるに等しい。斯かかる虚偽は後者の場合に於ても亦正しく有害なのである。誤れる理論的計算に拠る所の設計が、艦艇の覆没、飛行機の墜落、工場の汽鐘破裂等を惹起じゃつきする例は乏しくないではないか。併しかしこれが為に自然科学を有害危険視しないならば、歴史的文化科学に於ても有害危険なのは誤れる理論であり、虚偽の認識であることに氣附かなければならぬ。ただ後者に於ては前者の場合に比し、偏見や先入思想や利害感情が、実践的意志を通して知識を掣肘せいちゆうし歪曲するに因つて、虚偽抽象の潜入する機会多く、而しかも前者に於ける如く人為的に実験を以て直接に検証することの困難なる為、それが発見せられないで宛あたかも具体的なる真理であるかの如くに取扱われることが起り易いのは如何ともし難い。其処に危険がより多く潜むことは事実である。併しかしそれだけに歴史的实践と不可離の關係を有し、国家の政治的施設と一層深密なる聯関に立つことも上来見た如くである。これを危険視するのは却かえてその密接關係を認める結果に外ならないであろう。若もし真にその認識としての性格を理解し実践との聯関を自覚するならば、一切の成心を去つて謙虚に之に沈潜し、それと合体して主体的に之を活かすことに依り、之を使うことを努めなければならぬ筈である。政治家の達識は科学を嫌い之を避けるものでなく、之を自由に用い得るものでなければならぬ。其際所謂祖を殺し仏を殺すという意味に於て、科学を殺し、知識を殺すことは、固もとより歴史的实践の絶対否定的行為に必要である。それが上に述べた知識と実践との聯関の意味に外ならない。併しかし此意味に於て殺すことは同時に活かすことでなければならぬ。絶対否定は則肯定だからである。矛盾に於て矛盾を越える絶対否定的行為を實踐し、科学的知識を媒介にしながら之に捉われる公式主義抽象的合理主義を脱却し

て、それに対し活殺の自在を得るには、科学を嫌悪し知識を忌避することの反対に、何等の成心なく科学的知識を一たび自己の上に完全にはたらかしめなければならぬ。我々は道理以上の道理に至って始めて眞の道理に達するのではあるが、それは道理を無視することではなく、却て徹底的に道理を媒介せしむることである。明治時代の達識ある政治家が、虚心に西欧の科学を学ぶと同時に、之を用いる実践上の力を養う為に禅に参した用意は、今日当に顧みらるべき所でない。単に経験に由つて養成せられたのみに止まる所の常識は、到底歴史の転換期に処して誤無からしむる如き力を有するものでない。これはただ科学的知識を媒介としてその主となり自由に之を用い得る明眼達識に俟つ外ない。科学の教える必然の法則に従つて将来の歴史的動向を豫見し、未だ禍乱の動かざるに先だつて先手を打つ底の活眼勇断あるもののみ、現在に迫る所の危機を処理するの任に堪える。為政者にとつて斯かる時代に最も必要なるものは、時勢に先んずるといふことである。これは唯科学を媒介として而も之に捉われず自由に之を用い得る達識にのみ能くせられる。幾度か豫測せざる不祥事變の突発に会いながら、なお社会の裏面に動く歴史の底流を洞見する能わず、時勢に先んずるどころではなく時勢に追隨することさえも出来ずに、時勢と逆行する政策を以て一時を彌縫せんと欲するは、其主觀的意図の如何に拘らず国家に忠なる所以でない。その無識こそ最大の危険であるといわなければならぬ。而も自ら悟る能わず、更に国民を牽いて之を無知無識に陥れんと欲する如き、国家の深憂之に過ぐるものがあるうか。国運の障碍となる如き不詳事の原因が知識の不足偏狭にあつたことが、其關係部面に於てさえ認められて居るのに、文政当局が知育偏重の弊を説く如き、全く顛倒ではないか。知識の弊害と誤認せられたものは、実は眞正の知識にあらざるものが知識たることを僭し、却て眞正の知識を圧迫し窒息せしめた結果に外ならない。此弊害を芟除する途は、知識を制限することではなくして反対に眞正

の知識を發展せしめることではなればならぬ。若しまた従来の教育が知識を偏重したものと教育者自身が認めるのであるならば、それは科学的精神の根本を培うことに留意せず、単に学科配置の整備を以て知識を涵養するに足ると誤信する形式主義の迷妄に外ならない。現在の我国の教育に於ける最大の禍根といふべき入学試験本位の弊害が、国民の健康を銷磨すると同時に、殆ど全く教育の實質を侵蝕しつつある如き状態に氣附かず、単に形式的には知育偏重の如く見らるる制度が、實際上何等の効果を挙げ得ずに居ることを忘却せるものといわなければならぬ。果して然らば、依然として当面の急務が、科学的精神の涵養を国民精神の涵養と相伴わしめ、情操教育のみならず、それと共に知識教育を尊重して、速に其効果を挙げることに存するは明白であろう。何れにしても知育偏重の弊を説く如きは時勢を知らざる顛倒の説といわざるを得ない。その説く所とその為す所との矛盾の蔽い難きは当然の事である。

- 『哲学と科学との間』（岩波書店、一九三九年一月第五刷）所収。
- 収録にあたり旧字は新字に、旧かなは新かなに改めたが、一部の漢字は旧漢字のままにした。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- 理解を助けるために割註を附した。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/~hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、

「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。